別 3
5止
5

春

元日（ぐわんぢつ）
鶯（うぐひす）
春月（しゆんげつ）
野老（ところ）
帰鴈（きがん）
花（はな）
梨花（なしのはな）
躑躅（つゝじ）

子日（ねのひ）
梅（むめ）
春雨（はるさめ）
柳（やなぎ）
雲雀（ひばり）
櫻（さくら）
蛙（かへる）
藤（ふぢ）

若菜（わかな）
春氷（はるこほり）
若草（わかくさ）
椄（つぎき）
雉子（きじ）
櫻鯛（さくらだい）
若鮎（わかあゆ）
三月盡

鹿（しし）
春雪（はるのゆき）
蕨（わらび）
佛別（ほとけのわかれ）
蝶（てふ）
海棠（かいだう）
三月三日
雑春

俳諧書三酉精舎箋呈荻原乙彦記

鳩巣文庫

ふ684

帝國圖書館藏

ガラス使用

夏

更衣 祭 百合草 螢 夏月 端午 末摘花 夏菊 富士詣 嘉定

牡丹 郭公 芥子 蚊 鹿子 競馬 瓜 氷室 夕立 納涼

新樹 杜若 橘 若竹 青梅 帷子 夕顔 扇 雲峯 泉

新茶 若楓 樗 短夜 五月雨 早苗 粽子 蝉 祇園會 鵜飼

海松布 御祓

秋

初秋 七夕 稲妻 露 荻 槿 月

蓮 雜夏

一葉 玉祭 鹿 霧 蘭 花野 名月

薫風

残暑 躍 虫 芭蕉 薄 色鳥 九月十三夜

豊酒

秋扇 相撲 鶉 萩 女郎花 蔦 雁

ガラス使用

砧
菌
紅葉
重陽
新酒
雜秋

冬

初冬
時雨
茶口切
木葉
霜
雪
霰
氷
水鳥
鷹
炭
埋火
綿
紙子
寒梅
年忘
年内立春
歳暮
雜冬

小町躍第五ちらし

春

元日

子日なりわか老る年
家さむりよ孫のこれ餅乃かゝみ外
神代からも堂川や日本紀門の松
命毛やなかき試筆九千六十
それハ又延喜式なり國乃春
あまてらす神代の事もかゝミ餅
多川春や日よミ九神の支ら流し
二度さ川や枝小枝さく花の春

白云
嶺利
泰重
言丸
常辰
紫言

年玉ハ千箭(ちゝこ)りもろ紀扇かな　友貞
とゝのや世の除時(てんじ)のまつり升の春　定親
大つくハ年うちの魚ろ新菜かな　好孚
よし述や今網と日本の律司(りつつかさ)　政之
世りちうや天地(ゑんち)和合(わごう)の花乃春　方寿
餅(もち)鑑(かゞみ)やや花も実(み)もある春の春　信世
書ぞめや一字(いちじ)千金(せんきん)名よの春　親千
もち花や紳々紙継穂(つぎほ)の家(いへ)桜　末安
孫(まご)なりや惣領(そうりやう)ふし二度乃春　有哉
若水や天乃わかつる春の雨　家雅
人こゝろ花実(だつ)の時ぞ今よの春　為親

門壹(かしまん)や喰ゝ如律(きうきうによりつ)を祝の声　智詮
年酒にそよつや花よめ佐保姫(さほひめご)は　方女
國々も言ふや名所(めいしよ)の花の春　親信
よきためし引てひかるやちらしめ　正朝
屠蘇(とそ)酒(さけ)の味(あぢ)ハ甘露(ろ)ゝ三川の春　久次
門くや年徳神の大座ろ　三辰
若水や高度の春縁かけむすひ　元宜
山とうる藝(ちう)乃もしめやかさり藁(わら)　信元
ふおそみ祈る年玉のおもきされ　家立
二本(そさき)にも三寸(みき)そなへをり門乃松　重方
餅(もち)花(だ)と玉よもねまつ柳かな　宗信

書ぞめや久しき世よりいろは哥　俊仿

みなくやりの分かして去年今年　廣寧

来年ハ去年とやいはん冬乃春　道遍

神の代ハ内侍所にかゞみもち　家勘

あら日や和国お蓬萊[illegible]の春　時久

色なるそ誰にあくつき屠蘇の酒　昌久

君か代のあり数ハ子やちゞ乃春　長好

御代もかも[illegible]やうらひそめ　秋好

大かたハ茶よりも[illegible]や去の冬　成政

とし徳や来る春毎のきやの神　重良

聖代もいはし目のあたまか神乃春　重澄

蓬萊や来るゆし徳の神[illegible]山　康吉

書ぞめハ四方の海よりや硯かな　随師

二十二の春や識筆の廻文哥　正利

餅花ハ常盤木よりし千世の春　正重

繡せるやきおとたる小さる乃春　存示

半切や其菓子と[illegible]川の春　惟弘

とし徳の御蔵の門やあきの方　重利

ねかくハ宝の絵ゆづりおとしだま　一正

一とせのはんさはとりかたきの春　親興

まかつては年はりくめ[illegible]ひと　重昌

若水や京にはくまん八千歳

君か代や嚢の正月紛かゝミ餅　玄澄
あらしやかつ紀をも開てけさの春　長吉
蓬餅の一滴なりし帝上の春　宗祐
たへるは賀ミかられよ今上の春　成次
贓物の一字童精春乃春　寛賓
花ならは今上は甫紋の四方の春　同
いつみなりの心にあらきかゝミ餅　道与
あまつむや三千文字はわか一乃筆　知徳
神の代れ白めしや一女三ケ日　常辰
書ともの文字や神代のこゝろ縄　立志
名木の四方にかくれぬ花乃春　同

元日や鐵もよろこん日のかゝす　三直
年玉や我身にはよる老の春　泰重
鷄日は四乃時あるとしのめの都　友貞
門松や千載よりの家乃風　同
乾坤や春秋たうれまくらしけ　同
かさりとや世れこゝろ町たさ殿　定親
元日の文字や神代よりかな点　遠立
恭例よりや去年の神事と今上の春　同
古年はあそふかすきの関示の那　同
万代は神りそあそふん万乃恵のを　昌房
去年は川は今上の枝繁の花の春　同

書初や松つまきの字老の春　栄言

年徳の神や正直ゑまりし　親十

賀の斉れうされ云寿か春乃春　同

さかつきに仙家やうつる屠蘇の酒　鷺親

主まうや新郷小貫の市乃棚　萍子

去年とし川ハ難波のみをつくしの春　立圃

らうまうやは可江乃くてりそん　同

とおそゆる国常立の御代の春　同

年徳の女神男神か春の春　同

元日や日本ありかけ文字こゝろ　同

竹魔られ米そ鬼矢乞のまの春　同

門出や千載集のかゝみもり　同

去年からく中ゟあわせたゝよの春　同

餅花や左大宰相の紙の幣　同

なゝいまさに六位すらしも春の糸　同

御の字やかさらぬとはのものゝ春　同

もち花も今ハ小松よ初子日　同

初春り出もひらくよく初子日　同

去年まてらくゝ我けさハ宿の春　同

子日

引つまゝくあそゝつや小松小姫小家　立圃

ガラス使用

非の名にえんみひろ〳〵小松かれ　同

廻文
若菜
はるひつむ花かわかなむつひるは　英言

霞

八景
近きハ寺やかすみの一里鐘　友貞

いにしへの奈良諸白か八重かすみ　寄富

春は日りかさゝれはあやめか深　信世

篳木の声同み寺そ承霞　定行

雲の紬にたんさう筋か横かすみ　立圃

鶯　百千鳥

谷みつき鶯篭やからし藝　鹿哉

うくひすハ宮れ山家乃二すみか　正冬

鶯も都なかりせは目白か那　玖也

うくひすやひかうえにつく楽の笛　梅遊

鶯も来く梅かえやうくひ物　如水

うくひすや春れくやしの経乃段　正辰

うくひすや漸く千部法の声　友貞

一聲ハ山りこゝ夜か百千鳥　以立

鶯はけさ河津や古今の序　親重

梅ちりかくうくひすの夢や鳥兜　昌房

常や世にゝ媚梅乃花は情　立圃

梅

梅ハ花小野が花は面影の御　貞室

かいてつんよ何の香ともなし梅乃花　宗茂

難波津にさくや木花毎年乃父　季吟

胡蝶もあかひとつや庭ま梅　方格

名ぞかゝる難波の梅や伊勢暦　貞伸

咲花ハむつも媚なり御神木　武純

春はやの窓や黒方もしらん乃花　光弘

白梅も伽羅くれなゐ井はつかされ

とのつゝる手向る梅や香と花　好与

壽梅や神の水にまふりの手　友貞

尖よりハ面影さくらか梅乃花　重明

石梅のちしかみ阿まり匂ひらぬ　季立

梅かえやいきく香炉の行のよし　同

うの毛や浦しれむあ乃毛か匂ひ　定清

北むきは窓や先さくしきの花　宗雅

梅さらいゑの袖かれし紋不　信世

梅か香や手さくりまさの夜半の風　同

香ハ巣てみしらすとよし梅の毛　同

ゆくへまちうつも香なり梅乃英　同

ガラス使用

梅か香や四方ニ散ゆく神の使者　昌房
香ハ月夜梅の文字こそ声乃闇　同
むかしやこれ南枝北斗の星の紋　立圃
橘ハうつる袖乃香かむめのこれ　同
散梅やあやまてれきんよひの星　同
うつり来く同ゆ郷そたよりの梅散　同
栴檀の二葉ニ津かむ梅のとしか　同
むめか香の前ハ闇ニやさくて鬼　同
梅か香や居とり来とする床しら　同
散梅やむかしの主よう色の花　同
むかしハ兄をあいもうるや姫小松　同
神縄の梅か香ゆりそよ松の朝　同
迴文
しめさくれとみそとそとさくうさん　同

春氷

とうかりとうつや水の底ちら紋　知徳
淡かりとけやこうかりもとけ〳〵水鏡　秀立
なをくといよありよくや朝氷　立圃

春雪

とけはつそてえんねの宮しそまいた　重頼
高砂しれ瀧とつれなしや宮かうれ　未安

爲まれ宮四方のなかれや四方乃海　毬也

（廻文）きゆりけるなんとよみるはのちる宮　友貞

（円）篠の紫小雪はやはらか庭のさく　定治

かる宮り黒白をいさや白乃犬　立圃

春月

春の夜のちらいあやうしおぼろ月　信元

底清き影象のかゞみか春乃月　立圃

春雨

方角や東風のふくすゝ春の雨　立圃

若草

はゞくろし芦や難波のうり川め鍾　政信

若草に走るや嵯峨山乃へちろ　立圃

蕨

屋うてともなくてなんなけれ餅　任口

山くれたくのまつ出とろいうか　信世

野老

あらやかく仙境之人鬚とさら綺　梅翁

柳

ガラス使用

風ふいて珠のかくへきやうさ鬟　未得

冬ふうき内女房の柳かみ　宗言

大家をもはなれも柳の出かゝりし　同

青柳や宮に寄して糸さくら　勝定

藤毛枝すりの色うハ風乃柳かな　参之

風れまや庭のくふとうくつる柳　信世

花ちりのる風や柳の片贔屓　友貞

塵にのけくさうね花乃柳かれ　立圃

青柳や都せぬ風乃うちひ酒　同

花入乃みるなまも継れやわきうね　同

椿

花さむの露とあへくらの流かな　和年

蓬莱の種やはるゝの玉のえさ　立圃

佛別

命あるは何のわかれのうき佛　路也

かくてハ緑らんの雲の釈迦の嶽　有直

うきわらそてゆうるし道の涅槃かな　友下

帰雁

かへるれも是ハ遠浦の帰帆かな　昌房

くちなしハ磁石に針うか魚の唇　立圃

雲雀

ゆんへとらしれ空なりひとり鶯　誠之

声ハひきくなるや雲雀の高ちやう　吉定

そくやいうみうつの空うつ雲雀籠　之信

雉子

せらのもれ来つき肩やとまり杭　寸武

蝶

せんさつみまんさいらくハ蝶の舞　可久

舞の後わか紙あけもれ蝶か那　重頼

花

名香ハかれ木に花のかほりか那　常辰

ととひの花のなきまやあすか川　同

花さかり栄耀ハいつまで月とところ　同

菩提にも極末なるハし花さかり　同

おもひやるらやそなの去月かな　湧及

物乃師や人れあらはれ花のゑん　和好

花染の小袖や老れうくま嚢　重頼

奇人乃うき縁ハ花の名所か那　塵言

ガラス使用

おしまねやさくらの花の御衣木
まつ迄てよ心の色乃塵ほこり
見とれくハ靆か雲かのうへの空
花の雪やかゝとかすみ風次第
風筋の柳やさくらの滝乃糸
爲りて咲く親に似る子や花の雪
廻文 らくまてそ花見てみなは袖まくら
同 花の木から手綱なして槻乃縄
同 問ねらし花のその名ハ忘ゝぬ人
同 邪乃名ハ忘らし見忘ら花の名
同 花の木かのけさに花行の墻乃縄

同 知清 雪学 重次 忠親 未得 真久 定房

色の香ハ見せぬか風や早乙女かね
蘂の枝のこやけみ色の誰かな
見ぬ和乃かくさ紙よの花見かな
東山の庭のさく木乃さる見かれ
ちらぬまハ花紙わもて逢山かな
月紙みくりとつハ花の山路かな
若木にも色やむかしのおさなかな
咲まけの言葉の花のうきまこと
花のえんぬうさハ女波男浪のは
色より奇見案してもわ読せよ
冬木風あく寄ゑし何とく

親長 立安 同 同 同 資家 方春 吉孝 玄安 春良 保友

人乃都乃紙みよしのや花の色を　正時
花くのさかや国土の宝珠　辰貞
と錦ハ雲夕日かくし義の雨　同
雨に風そひくや花の莟まくらひ　宗雅
狂言も一乃名ハ花子か那　同
老人も杖やまされし義の陰　重孝
ちりくく粉蝶やまさる花さかり　坂村久忠
月花の色かりなりそも詩哥か家　助人
咲花に方角志るしかけひ哉　親平
一年乃色も河ふり去奎か那　同
春雨もめくされし絵世よ花畠　同
一時の栄花や春の夢乃酒　安直
留守といふ人もたのもし花さかり　玄札
作り木や理非にあらむもの枝　信世
ぬすむへき花に心乃垣もなし　定親
世ハ春すり追つきなき人かな　同
花に志の逢身のかひとくひの花さかり　春重
蝶鳥ハ比翼連理よ花乃枝　同
色をとる絵紙もなしとかちらし書　為親
天ハ花地ハ何なりか酔の都　昌房
かくやくと色も日の出かむかし山　方孝
香ハ御法花のかをりや佛菩薩　貞方

見ぬ恋はさこそ名所の花さかり　同
名筆やこれも見ぬ世の花の友　同
友としてより紀為や三月雪月花　卜琴
入あひも猥だしらする花見かな　未知
行く山の落花や塔のなかれくの　同
文殿のよみきといつや春の酒　政之
桜川のすゑや水上ぞ花の滝　同
蝶鳥や花に一樹のあひやどり　同
言の葉やむかしの里の花つぐし　逸豆
名所とや春に行そふやけ烟　同
花いとれちるは縁の遊山かな　同

春ハ雪富士山も何ひとしほ山　同
世中ハ苦しき楽なれ花の風　同
むかし守閑所ハ今の古紙かな　同
くすねとも風ゆや酔ふ花見酒　同
いけ花のなかめや床乃卓香炉　同
桜狩りや我らもよその花乃客　同
好物ハ下戸もたらし花見酒　同
漸満の雲や目にかゝる春の暮　立圃
さかぬ末も春にましいろや花乃友　同
あしよりも目しき先ゆけ咲山　同
花みちひくたと縁りより乃山路かな　同

つかむるは京西香か花のいろ　同

さく花折られ人のことはりなきうり　同

よし花は人の花の色人末か那　同

采むかたそ見るかゆかしき乃綿　同

千本の花に都あり大念佛　同

人ちらぬ山の花や道人者　同

在さけや花の名所の案内者　同

養老花か本ともなやく花は瀧　同

床しさハ花の名所乃一さかり　同

清水にぬれまえや萩の瀧詣　同

うつし繪紙又仙世に似せ花の雪　同

築りては嵐や波乃花ちらけ　同

枝折りもとう春ともさやハ波の花　同

えめくれし十方くれよ花乃雨　同

居なからも花ゆひ折りの花盛　同

花紙摺人や目ふく梅むかひ　同

花のこや此春月乃筧一三　同

辻うりや四方に散らまね花盛　同

花くれは皆海よりひるまよ老は友　同

人よりかく酒とわそこてむみ衆　同

紛無やみろか惡となる花の本　同

酒盛の中のこ紙せり雪乃文　同

陽をよハ芝居やすりよ色の母　同

桜

難波めも名ハかゝるや伊勢桜　庸信
接穂やさゆひハきつとも児さくら　芸彦
一節の三幅乃禅杖伊勢はさくら　家雅
家ほとや寺まつ里へ児さくら　親千
楊貴妃や唐土ハ志らぬ庭桜　保友
家さくら今こそふ言ん書の花　同
花てこそ見る老柳の糸さくら　金盛
熊谷の花をも手折や無道人　重俊
花さくハ不老花よりしきそ腕さくら　正盛
熊谷の色をもかすミ乃衣かな　定法
ちり無の縁とひ法すか児さくら　素友
とりとりや花乃わきの達桜　春山
見とれてや行末も志らぬ山桜　常辰
花桶をミりよくみもり腕さくら　立圃
色も香もいうにおよはす糸さくら　同
善ハいそき悪なりきりや遅さくら　同
康綾を一撫師とするや桜かり　同
心とき小児やなれく稚さくら　同
八重さくら今のミる目や奈良の京　同

ガラス使用

児さくら散くかしこちや小新發意　同
花乃色のうはつや小町伊勢桜　同
是門とやあらてさりゆく寒さくら　同
老の身の乙女をかくや遅さくら　同

桜鯛

花ならは八重の塩路よさくら鯛
杉やさと名みしそたくれさくら鯛　静寿
からし酢よかろいなまさら桜鯛　一幽

海棠

かいてうみきさうひらくを風りうか　立圃

梨花

海棠かいやさかりよいなしの花　立圃

蛙

かえる子はよしともつゝし守れ種　一柳
なりひらよ蛙や雨乞らひの守　重因

若鮎

石ふしれ瀧とこやけの小鮎哉　政之

三月三日　付桃　蓬餅　曲水

さかつきはまちか花之桃の酒　吉廷

ガラス使用

麻よりや砂糖にはえて蓬餅　以立

うすくこき野辺のみどりや草の餅　貞繼

桃の色ハうつりにけりな酒の酔　梅盛

名にしおりて三年酒に桃の花　昌房

えんね鴻のかしの葉かよもき餅　信元

躑躅

咲すゝね餅花の名やいそはし　立圃

藤

風ふいて立出し波かさゝかの藤　俊次

釣舟や花の浪こそにかゝる藤　宗雅

とのつゝる松風につけや藤かつら　嶺利

今こそハ氏の長者よ藤の花　昌房

藤はりのめくるやともえ浪かしら　立圃

三月盡

冬まのこの春の花かんや羽をかける　昌意

雜春

住吉のまつ代やしろゝのみどり　重頼

字盡しの聲や囀り鳥の跡　立圃

ガラス使用

小町躍第五ちらし

夏

更衣

衣更のさらひいけぬさかり世かれ　信世

牡丹　付芍薬

芍薬や牡丹の色ハ同しうへ草　誠之

芍薬乃長より花ゆ酔ひ酒　立圃

新樹

近道も茂ミは是しはらく夜　立圃

ちる花の跡のさかりハの若葉哉

新茶

色も香もふる人ハ新かき茶かれ　幸和

古茶新茶ひけとむかしとむかしかな　貞以

色も香も同しむかしの新茶かな　意伴

うすくこき緑まてえんゆうのき茶かな　宗静

祭

同鍋も数さん筑摩まつり哉　重頼

郭公

初音をえすかたくさき枕と書

ガラス使用

似せ聲はあやはりもうかほとゝきす　光貞妻

なくみさへわかつていふかほとゝきす　重一

それときく空耳りうか時鳥　泰重

佛身の我名となへつゝほとゝきす　友貞

哥よみよ雨しなくこすとや題名乗　常辰

安うしね音や慈悲山ほとゝきす　未知

月よ聲ありやとらやう郭公　貞立

かとゝきはなうねとりつや文字の聲　立圃

ほとゝきす寫は夜聲や名對面　同

そまくに人えりは音のほとゝきす　同

ほとゝきす漢字やかなの文字の聲　同

杜若

むらさきのうへかうけくしかはよ花　長安

さゝ波のかきつはたとやゆかりの色　立圃

若楓

下戸のえて顔はわか紫乃もみちうか　常辰

百合草

風はなし豊玉姫のゆりの露　幸増

とりそ咲や谷の乙姫百合のそれ　友貞

牛頭馬頭の名うつや高百合車ゆり　親信

ガラス使用

とく露の玉より姫かゆりの花　定親
花なくてねばくしの船やくさゆり　好学
又車かたむきハ庭のゆり乃畠　同
五月雨や車軸とふすゆりの谷　立圃

芥子

色ハ色ふ露ハかのこかけしの花　立圃

橘

たちばなやむかしの人の袖香爐　季吟
橘乃香にせかれくねる夜かれ
まちそれのよはひや梅の跡の情　貞室
香ちらすやちりてハむかし袖かをり　信元
めりもり橘とやさ菜のむかし　立圃

樗

聖王の代からむらさきの雲見草　定行

螢

かゝろとれ人ハ鬼火の野すみか那　信元
上ハまず下かほたるハ天津星　信定
ほたるやあれ木の下やとの晝枕　貞室
佛身かむかり絲くるうちとよ螢　奉貢
かゝろ火の一寸さきやぬ月やと　立圃

蚊

夏れし焔く火にさはる蚊遣かな　賀貞
樋の木は清くわかひの蚊帳かれ　清下
外は蚊の内は晝様のうちやしかな　立圃
夏の代より蚊や出そめくる川の声　同

若竹

笹も竹夜と色とれくまし里　重頼
良薬か若竹しける夏乃雨　親宣
かもころもさうてされしや宿の竹

竹の子の数十つ百や千世のさね　西翁
盗人も竹の子ゆへの窄ぢられ　未知
りとしの人竹も名染の一さかり　方女
いけ垣や竹乃子たれもとめの花　立圃
去年まくおとしは孫か薹乃竹　同
竹の子の風しらひ親か梅の雨　同
若竹やまたらん色のる牧乃駒　同

短夜

夏の夜ハまくら霄かゝる浮寝かな　良重
夏川の夜ハ雨と霄鳴かる鳥の聲　寒松

こしか折や孫をせわ酒の二日酔　立圃
明やとし夜ハ月まつ日まつ外　同
夜の秋や月のうきさみのかり坂　同
老乃秋ハなをと早く世の月みる　同

篗月

扇とはそらふるやあれ山の月　重頼
すゝ風紙まろめし月のひろ外　愛立
乾坤やよふまね月の扇絹　立圃
月影ハ扇なりし此川瀬かれ　同

寐子

春日野やけふむしろさし乃姫のこ　季吟

若梅

みるのこれさかや難波の梅のさ孫　立圃

五月雨　付梅雨

さみだれハつゝ八専乃ま日もとなし　定元
降まけよ南殿少殿のむめの雨　定清
難波女よかつけ袖笠梅乃雨　立静
五月雨の晴間や沖乃小人嶋　立圃
五月雨や須磨よりおくの滝津川　同

ガラス使用

端午

祢あされハ郷せむしろさ紀か花あやめ　定親

松ならてひくハねのひの菖蒲かな　尾州 友下

家々のしるしハ守り刀かな　立圃

雲もしる菖蒲かさりの花ひや兜　同

藻の紫ハ千世りかさねり粽かな　同

競馬

駒かへていさ見にゆかんあしそろへ　是等

とられすよ人みのりくらくらへ馬　後兵

乙ゝ姫や賀茂深草にくらへる　昌房

畜類の二こゝろかくる競るかな　方孝

しやされくか川よ乗ゝる競馬哉　信世

惟子

かたひらや雪よりましてくらの衣　泰重

着る人も風ハ庭にて芭蕉布　親信

うきむゝや汗絹三わりのゆかた染　守長

早苗

若苗ハよつ結をとりゆふ田方かな　英芳

末摘花

摘む人の爪にそまるや紅粉の花　立圃

ガラス使用

瓜　付茄子（なすび）

やましろかしこといへしあぜの瓜　徳元

ひしされの色られ時やなすなすひ　未元

垣君つん乃後そらされ小昨瓜　朋之

水にみつけくるはかゑしまくは瓜　琢世

ちわねまては後ハあこかや瓜乃花　同

手綾おれしと十とて八月のさゝけに　同

夕顔（ゆふかほ）

白瓜と見えしゆふかほのそゝ目かな　徳元

撫子（なでしこ）

なでしこハ夕かほに似ぬかゝられ　重一

石竹やともにかうへの露乃玉　朋之

さく花の色や珊瑚（さんご）珠石の竹　親信

なでしこの名はまさひの小猫（こねこ）かな　立圃

なでしこ乃色ハいらさりけるかな　同

夏菊（なつきく）

夏菊やとものかたくひの花の兄（たぶ）　昌房

夏きくや京より田舎（いなか）の秋乃文　立圃

氷室

とうさし雪風や氷室の山またの　盛之
餅は雪霰しとや氷室守　同
春は秋のいろ暮にこそ見る餅　昌房
歯かためやたゝに結ぶこほりの餅　去圃

扇

折つまは袖にそかくる人折あつき　貞伸
くまる升に白ふさて紙の扇かな　冨安
松絵絵師風なるかく扇の形　空存
風とおいくしそうねむく扇かな　一正

布目紙の扇は風や汗のこひ　乾宅
おけみそかりてまちこよ扇哉　是等
大のさいは月ともかつ團かな　重貞
宮紙よる人あつさのけふる扇かな　八歳　児
青丹吉あふくにしや奈良團　松滴
山くとたゝむ墨絵のあつき扇　一守
汗の紙扇ましては暑さかな　信世
よの人や異風紙このむ唐團　好学
舞にあそふ手はつるゝや白拍子　政之
風俗や和國わかつ唐うちは　親信
料すくてうし浴扇のうかあれ　永重

月とみえて風ハうちはにひかれけり　秀之
風ハ風字ハ丸けり錦の團かな　同
月雪紙風にまろめし團かな　昌房
涼風に画紙月次の扇かな　同
扇こそうつさ腰りるのつくひとれ　立圃
まかねとも腰に一さし扇かな　同
一とせに風紙人のうちはかな　同
日さかりもすゝしく扇や雪乃花　同

蟬

時ありとはなうをきりそ蟬の声　重言
未秋としらずすゞしめや蟬の声　夕翁
天しらん地しらぬせミの時雨かな　定之
蟬の声やまれ下都ハさぐり題　重頼
知しましき紫はきや蟬の声　定親

冨士詣

画ハくもりうちのはまろや冨士詣
山たかきゆへに貴し冨士参り　雪竹

夕立

夕さらや汗のなかれもわしり水　友貞

白妙ハ布波さらしれハいつも卯の花　立圃

わさひもきく月の白妙やわしまえに　同

夕立ハ庭にもいつゝ河内（かうち）哉　同

雪汁（ゆきしる）や雲有し夕の富士の雪　同

夕くれや雲に影うつる天水（てんすい）か　同

雲峯（くものみね）

太山も風にうごくや雲の峯　長式

祇薗會（ぎおんのゑ）

あれ山や此山見んさい祇薗（きおん）の會　

引廻して山見んくるし川祇薗（きおん）會

山はひかりたつみこそ祇薗（きをん）の會　重安

いかなれやそのかゝ山はきをんの會　宗甫

むけやひか山下とゝむきをんの會　勝明

山乃みなうつりわくせつや祇薗會

時ならね山は錦（にしき）やきをんの會　常辰

嘉定（かぢやう）

改銭の心

久ふりや寛永（くわんゑい）代（だい）の嘉定銭（かぢやうせん）　立圃

年代錢なくて世にある嘉定（かぢやう）哉　同

加増（かぞう）してうまく錢よし嘉定（かぢやう）か　同

嘉定にハ砂糖（さとう）も同し醉（ゑい）こゝろ　同

納涼

かさねきる小袖か上のあつさ哉　嶺利

しのいまん色ハ又けに六月　林可

涼風よひまにきいて世をすゝま　重頼

すゝ風やみなもひきさゝ置下風　令巾

升そく庭木に立やまたすれ哉　通親

涼風は腰にあちりて清水か哉　昌房

暑き日にかころひもうる風袋　見牛

身にしみる汗や涼しきなかれ河　立女

立丸日を涼しといふや詞やう　宗雅

しらむ丸まるくもちるか袖の汗　之信

あつき日よぬれくさるや汗のこひ　好与

汗ふみ風はひとせう扇か哉　常辰

えくみてそひろうく汗はまつれ水　有哉

昼ハ濃珠よりハ千珠か玉の汗　了空

汗ぬるハ日照に流るゝ泉かれ　親信

すゝ風やわすりつらひて汗か枝　立圃

涼風やきいてあつくあつき日丸さかり　同

かつ川よ日もすゝりせり夕にまくそ　同

泉

賢人の心くみしる泉かな　元重

まかいまは見るも入たき泉かな　正依

のこゝろもこゝろかくもきこえぬ泉かな　正近

巻瀧の紙手にむすひ見るもかな　家言

清めこゝろとおつきかゝる清水かな　政之

墨すり紙もすゝきゆすぐる手水かな　親年

鵜飼　付鮎

月影やうかひの宿とたのみけれ　定清

つかひ日もえらうて出る鵜飼かな　常辰

綱ひちくむすふ川瀬の鵜縄かな

月よはゝ見えもまへとられぬやうる鮎　梅盛

棚や鮎かゝる玉のまへし網　政之

鵜のまねの鳥かまねり入日影　立圃

海松布

まにの世く海の底をも見るめかな　立圃

蓮

法うつる人玉かゝし蓮の露　重一

濁みにすみわけゝる蓮かな　清下

花ありそふ蓮の臺やとくの経　玄札

まちはよりいつるや仏のみ手の糸　交云

廻文

紫れ筋は志ろ糸いろしはぢすれ紫　立圃

志ろきもみれもちりしの筋は和をなし

花を根にかへるやまさすの味と色　同

薫風

南風うつる座敷や無垢世界　友貞

涼風のうつりかや雲れ袖香炉　昌房

夜菊のかほりやそよつる南風　立圃

豊之酒

豊年なりす上戸や子孫に一盃酒　有哉

わく村のわらんやちよ紙ひとつ酒　盛之

酔は夏祓てうきめてう一盃酒　蓁次

し川舟の志るしや泊れ一盃酒　未安

さゝれ菊の露やましして一夜酒　友貞

宵なからゆるや樽の一盃酒　素知

御禊

恋せしと御禊とせしやうらみ川　空存

かつひかれ汗や茶のくなかるへ　昌房

うつ風や歌代となりすゆふなくへ　立圃

なつそはゝはらへて手水をなかしけへ　同

涼風ハ身にそふて物ゝ中よりくる人　同

雜衷

蟇ゝやいまさ六位の宿乃袍　常辰

井の水やあまりくだる沢ゆゝら　同

鵜ハのゝ火に入さ何なれし　家雅

愛宕山や塵壽ふみの富士乃宮　清卜

団子しやなりく二度云萬　有哉

与も子ふねうもそや波の高まつる　同

四文みる月とみそやうとく沖津なみ　来次

浪の紋織入蓋かうさ紫ちれ　家富

わくゝく花墨一つや角さゝけ　可意

夜山や須弥の四別れ面ゝ　和年

花ぬくはたゝきみけるやいゝ　童昌

富士垢離やいつもきえぬかれ川　高園

夜とふや青海うつと来乃精　同

墨さ日や細ふりもうく扇の木　同

腹中しもまつや未開れ来る人　同

しろく川ハ廃ほうれしもの川瀬ゝ哉　同

小町躍第五ちらし

秋

初秋　付文月

肩かへしぬ暑一口ゝ旅ゆ風　満直

秋風や今朝吹かしれぬよの文　同

吹の世乃口うつてをまけさな秋　但秀

一滴の露よりしるや秋津国　友貞

旅うけりや扇の風れ吹かへし　常宸

秋来ぬと耳に楊琴の響かれ　政成

今朝よりや見ぬ毛もよる川旅の風　己朗

昼もくらくまをそ今朝ぬ秋乃風　治住

まれうし袖ぬらすや夜雨旅の風　昌房

文月やめでたく読く蓮れかし　季吟

とく露やこれ秋津洲のふむすひ　為親

一葉

梅檀の二葉もちるは一葉かれ　有哉

今朝はましわりつし桐の一葉かな　昌房

まれうし袖をかへしと桐葉かな　元次

残暑

酒すゝはのちうあつさや二日酔　森重

秋涼しいの筋てらすちろり風　長治

皆さらく茶碗に弥の暑さうか　立圃

汗とんおちて一雫乃秋なりけれ　同

夜菊にあつきやのこる秋の夜　同

夕すゝみ暑さ残をは茶なりけり　同

秋扇

蜂耳そやむしれぬ桑とさす団　道之

涼風ハ左わしきろ秋乃空　立圃

七夕

天のかハく比翼なりけるや女夫星　信世

かハらぬや心ハひと川ちかりし　可哉

星あひや昔七夜のくもれ事　知徳

わしひの契りもこよひとりかし　春良

中川にちらさる星をひろう言　常辰

垣あひの星ハ酢貝かひきし川　立圃

うつろふや夜さるゝはしとぬめとも星　同

玉祭　付 送火 施餓鬼

盆まつりハつそなふれ佛在世　定行

水せうき逆縁ひわとらうへし　重頼

とり出すやそしつや冥途の弱法師　常辰

踊

天竺のおどりの奇ハ盆後なれ　昌矩

男どんぶ寺まりしはらや伊勢踊　玄札

思ひ禱ちらく扱ちをかけ躍　常辰

三線ひくころの鉤やうけおどり　松女

やりころ奇しや男女の中どをり　資方

色ちひのおどりはせ盆乃為　貞徳

奇いつも小町踊や伊勢おどり　立圃

親とひく杖とり子多し盆の月

女房のおとこ出立や馬簾おどり　同

相撲

まけずれくハ井るまして狂ん相撲かな　重庸

月まはらんくるはいそれおや曲相撲　勝明

あつさらさしそハおそろしく勝相撲　廣寧

相撲場よりまつやかゆん河伝け　好道

稲妻

いなつまや折ふしむし月のさやの紋　立圃

康

鹿(しか)は音(ね)やおのがつまこふなかれ川　永立

廻文　かのしかれ音(ね)色(いろ)をとりの紅葉ふかれ　常辰

鹿(しか)よけに当(かう)らうかうなはけなし　元晴

虫(むし)

嵯峨の野しとまにさけくきく虫籠(むしこ)に　貞徳

それくみかうらやなのゝ虫の声　資芳

種(ちゞ)は声より歌とそつゝや松虫(まつむし)籠(こ)　立圃

廻文　のきさらん虫は音(ね)のしむらさき野　同

鶉(うづら)

山の音や玉(ま)の背の名ふはかさ鶉　資貞

露(つゆ)

夕露のけふてきまあらし鞠(まり)の庭(には)　胤房

月まいらくとゝまるね疵(きず)や露の玉　俊之

日(ひ)ゝ(び)くくにわくさなりきる露の文　吉忠

廻文　しなもわいたつ露流しなもなし　夜泉

錦わきさ秋するや寝覚(ねざめ)えんもとけさ見露　定義

露ともと夕顔まとひの小節かな　立圃

霧(きり)

朔夕紅葉(は)竹ならし霧(きり)はうく　政之

名は霧(きり)やしら川しそ水のかすみかれ　常辰

ガラス使用

芭蕉（ばせを）

いつしかね宵ハしらせや月夜影　三信

荻（をぎ）

濱荻（はまをぎ）ハ都や秋の伊勢こゝろ　交几

旅寝して聞（きく）に名所や荻の風　為親

秋風の口（くち）ならへたりおきの聲　立圃

萩（はぎ）

廻文　名ハ野雉（のきじ）萩（はぎ）よりよきハ萩（はぎ）乃花　倶秀

小松の萩（はぎ）ちるや小町かるれば果（はて）　正次

ゆかしさや萩大名（たいめう）ぬやまと言（ごと）　立圃

蘭（らん）

廻文　なかしまはらんと一んらはましかな　元親

薄（すゝき）

いろはにほへの字なりける薄（すゝき）の那　一函

風ふけは尾（を）花招やとの袖まくり　定清

松ちかうして兎（うさぎ）たらし波しら　友貫

野（の）飼（がい）には尾花あし毛（げ）それ駒（こま）　立圃

露や玉（たま）すゝきの糸（いと）わりそとし　同

女郎花（をみなへし）

よみくちの文字（もじ）もくねるや女郎花（をみなへし）　立圃

ガラス使用

槿

あさかほや色も瑠璃君まうらる　季吟

羽うは色同しう萼の花見られ　有哉

あさかほ乃花や都もな時の鐘　立圃

花野

香に匂ふのくさにさくや花野哉　立圃

秋風のみ山さくくさとかすら薮野しれ　同

蘭道は先みちくさの花盛かな　同

色鳥

渡りをしりやまうとこゑう時分から　如貞

騒の同いぬしてしるのくしらか　立貞

老乃須もしめくこそや四十から　重因

蔦

松にしもよ蔦や時雨のそとより道　昌房

月

夜の月名月望の雨よし月乃秋

酒樽もかしつくしての月見かれ　貞盛

秋らのむ気もかくしき月のかや　元朝

ガラス使用

ありして
見んさへ三年とや山乃月　之家

如月宿(やど)れ庵を経わたし秋の月　昌意

わすれていさよふとこそ出ル小笹(をざさ)の月　同

是(これ)ともまことお此間(ま)の月や格子窓(かうしまど)　重頼

けまとも月乃秋にまよや新發師(しんぼち)　可全

文書(ふみ)ともよりそふ世(よ)乃人や月の友　信世

おほやけのひまにしら出(で)よ宿(やど)の月　資方

わくらはささうや心乃月の友　重良

月見(み)や捨(すて)かりにせんまくれ露(つゆ)　定親

萬水(ばんすい)のみなもとなりし空(そら)乃月　春重

いさよふやのかまはくもり月　玄札

見ぬ人もなくしもの月や古の題(だい)　常辰

山寺の尾や長月の丸かゞみ　立安

月は水うけやとくし蓮乃玉　吟立

四方はいさ座敷(ざしき)と月の都(みやこ)かな　同

池ありの月は千里(せんり)も限りられ　清下

月影(つきかげ)のかもをならせぬ関(せき)りかな　嶺利

名浦にて
月みに景(けい)何(なに)にたとへんかすかなる　昌房

さ雨ふりれふりさ雨とこそ水の月　立圃

月さへれ里(さと)や小倉(をぐら)の色紙窓(しきしまど)　同

月影(かげ)や人乃ふくまやさうし出(で)ありの　同

山すその夜こそ月乃影法師(かげほうし)　同

応神の御世のかり田も池の月　同

五行 入月にさしむかひぬる羽白山　同

まし事ハ天の道なり秋の月　同

月きすめり秋のよひとりふこか酒　同

月かくす雲につけるや不審紙　同

月影をくみかへりけり水担　同

月かけやいつくさはつて波かしら　同

廻文 閨のとうえもれし月よみ非人文　同

ふかきよの下にそふるの月　同

ゆらゆらは空ともそうや宿の月　同

天にあるつき地にうつる鏡の月影　同

名月

名月ハ入日をまねく扇かな　久翁

水影や船の実名天乃月　信世

名僧のあはひの月ハ影法師　好孚

古さとも新月とみることひかな　智詮

名月ハくもしるかせかの名月　一知

春 今よてるやさきの二代月乃御名代　塵哉

明月の名には及ハぬひかりかな　盛豆

名月ハ雲がまるめるむかしかな　同

月の名かゝりとるにせよ東山　同

ガラス使用

月これもそこに句作をた霞かな　宗雅

名ハ雨ともみまくらや月の友　政之

（閏八月）
二千里外おもふよひの国月　同

同
行人の像付の舎にまよふの月　窓雪

同
二度見るや月はこのかゝり哉　友貞

同
ひさかたの桂や連理室月　定親

同
なみたらん色もおもやさよはの月　常辰

天と地のあひ寛中は月見られ　同

嶽の名に出ても月や如意宝珠　同

二千里外まて一灘の月の秋　昌房

千金やあくる月は名の一字　同

名やあよひまん丸くある嘆の月　立圃

扇をもちね月はかさやいつ西風　同

名ハ扇こよひの秋月はかるかな　同

ふるねの名みえとる月のも宵かな　同

すみよしは名をもらそ月はひさかな　同

世は月の名にかれもや秋津州　同

今宵ハ月見すいころや無正闇　同

小辰ありおゝ人こよひの秋の月　同

犹ハ中月のひかりや上の上　同

名ひろめハ世は武蔵野の秋の月　同

ふとするや唯我独尊空乃月　同

あすハ雨み二七れ月のむらくもか　同

名月ハいはくの山も新嘗鴫　同

再任の名たかき影や国月　同

九月十三夜

實ハあさよひつれ花やさかれの月　知徳

そらまめにうらや月見る人心　同

おの不思議みえしハ月も十三夜　同

月ハひとつ親ハ二度見るこよひかな　高敦

芋豆や月も名残の人品と人　重頼

ふめんと名月みる月れかくみ乃那　方孝

よし野ハかさねてたづねなさし今宵の月　廣道

二度の名や鶏頭月乃秋　是雲

露れ名残月のうつり小継なる　玄心

菊ハ淵あさしや月れ身あそび　幸

されの月くもりや名不の後の名　昌房

雪水にうつむの月や菊の露　淡立

後の名れ白きに志月れ真　文貞

下れ句の名前よ今宵の秋乃月　立圃

月ハ准三后一乃いひり　同

名残ハ後かさねよ姥が月　同

琴乃緒やかゝるん月れ萬歳楽　同

雁

とをり字の用にかゝるは玉津雁　重貞

歎く〳〵かゝりけりて越路かな　友静

雁の字は縁は江ふまてくれとかれ　常辰

落とらんね雁や紅葉のうとひはき　立圃

砧

うつ槌やとをれる上はさよ衣　冥真

菌

松茸にいまてくるりや小倉山

とりあへず茸や手に小松茸　貞也

きのこある秋山の雫のおもし種　昌房

照日にもいさ松茸の笠やとり　立圃

毒茸はとさりみなゆる山りゐか　同

紅葉（付名木　紅葉鮒）

きのふの笠も錦よ紅葉かり　元也

山河の瀬ちらくは綾すりもみぢかな　秀立

春秋や段々小段の梅もみぢ　廣寧

松一本かくれなるやうそもり柏　昌房

川音の時雨やそむる紅葉鮒　貞徳

下くゞる水より植して紅葉鮒　童方

紅葉ぶなハ男康の恋れ染まらか　麈言

うすもれし粒こき敷のもみぢかな　立圃

非情にハ老木やよろし紅葉賀　同

唯松のうちもみぢやときは木　同

さくら鯛やとも名をかへて紅葉鮒　同

重陽　付菊

重陽も五節のなかやし女草　友貞

菊ハ瀧あさかてハ何處菊川　魯立

菊ハ淵よりわきや四方にうるほひ川　同

盃やいくつつきて菊の淵　宣安

久しくにうつるや名酒菊乃露　家雅

ひとり湯のまくや山路の菊の露　吉定

壺入りし仙術よるや菊乃酒　泰賓

良薬も口にあまいやきくのさけ　昌房

百菊ハ數となしくもとの秋　同

醉ふして起まどハ花の菊の酒　同

百菊ハさかりや盃銀星月夜　同

名にきくの香やうつる紅葉賀　立圃

老こゆの菊ハ乗露やまけひ星　同

露ハ酒可盃うくる乃ちかな　同

又ハ何ゆかりみきくの染小袖　同

いろや花香はうせし後の菊衣　同

脂をぬき菊のゆかりや酒の糟　同

重陽の御客やきくのゑりも　同

新酒

新酒古酒つまく舩などそ出せり　重頼

さうつきの新とくむそ古酒新酒　重昌

冷酒ハきくく人かんどりよハせり　壽躬

雑秋

川竹の時雨やさそふよあらしの音　和徳

ちまはこそいとくめてさし花火なり　長治

秋まてハぬり楽うや蝉の琴　舂山

志わうけ銭やせんかくや仙翁花　長安

ぬれ色を松にもそつる時雨かれ　久任

多年あつめ来く袋時雨の染葉　立圃

葉茶壷の肉ハよくるや秋の文　同

秋らの心中又ありこそ立田姫　同

小町躍第五ちらし

冬

初冬

冬きたり今ハはるへき障子かな

小春にもまそめやせん絵しき文字　定清

皹くにわくつみきうつ寂さかな　重方

時雨

川音や天象地気の一しくまて　友貞

河音ハふりまてれなしの時雨かな　信親

川音とは寝耳に水の時雨かな　自ん

山道の方角しらる時雨かな　好孚

めくまはハ十方くれのはしくれ　宗雅

北斗より雲やおこりて初時雨　政之

江南ハ天気あしよりも小春まて　宣安

しくくりゆくれか釜の中の音　重澄

さゝあみの時雨はらその雨てなし　常辰

袖笠や一時雨して一しきり　立圃

南枝とはよそにてよ木葉の小時雨　同

いつくりの瀬戸よりまた初時雨　同

南方にいかや他国の小春まて　同

降りさうに諸国めくりの村時雨　同

ガラス使用

茶口切

口きりは茶や常盤木の緑　立圃

木葉

塵塚や木の葉は風のたまり水　好孚

時雨にもぬれまさるや山の木の葉猿　清下

風筋や木の葉は雨のながれ川　宗雅

耳しひかおつる木葉は志くれ　親昌

神木の落葉や今も梅の雨　重寛

松陰や木葉の雨は人屋より　清宗

宮と葉とハ雨より窠の椎かな　慶重

植こみの垂やまれ葉のしぐる時雨　昌房

霜

とく置の六つさハ鐘の音冴る　大田

寒門とやいふべき霜の白ら立　宗言

わきつひは霜からたら枯野かれ　文仔

霜月や人下にふみの月は霜　常辰

花かまらはあきらかよ霜乃文　立圃

霜夜よりの袖や一番二番鶏　同

夕霜は早きくとやみつき裾　同

星乃精あまくだりてやよぎの霜　同

ガラス使用

雪

何とつくも雪かくと黒きものもなし　徳元

冨士山や不生不滅の雪ほとけ　後之

大仏といふつきあひや冨士の雪　親信

ゑ紙花にむかへす行道や雪仏　智詮

まろめつ種とゆふや庭の雪乃竜　吉武

大雪に逢てこそかはれ里まされ　業政

生国は越前のものか雪女　元定

いふくはおもしやしくん雪女　盛之

雪夜のかゝすゝ雪乃鷺の声　但秀

仏性ならうは龍女か雪とんか　可閑

雪の夜は月は白川夜ふかれ　後壽

花乃雪ふり紙かへしや雪の花　信元

寒もなく香もなき雪の花ばかり　弘次

打きらし雪はふりつゝ都のひ

あしのとか馬しも雪に乗りもせ　季貞

冬なから四季やふりする冨士の雪　久忠

雪と髪しれとも冬に何白か　就武

雪の日はふりそゝかすみゑ色もなし　秋月

雪ふり見んよふる梅の鶴に鷗の声　喜之

鶴るもやさえ見わかん鵝毛雪の冬　未安

あさかほと日まけハいつまて雪の花　長女

静かなり墨しや雪の朝からを　重總

山焼となるの年しつる雪女　重因

雪花ハみるきの枝（えだ）や遅（おそ）さくら　宗房

たわみくく雪や庭木給附（つく）り枝（えだ）　袁

されうろ犬（いぬ）やはしりね雪こかし　參立

雪の日ハ鷦（ささき）やかくす小海うひ物　同

初雪乃見ん食うやかたぬ上中下　清下

雪の日の道乃さかりや足乃絲（いと）　定行

入あひのつゝちりてやむ川の雪　信世

雪ふりそに珍客（ちんきやく）なるらん人もなし　同

餅（もち）と何（なに）雪や氷（こほり）と争ふらん　好与

貧学（ひんがく）の津もりや雪乃花こゝろ　昌房

八千（やち）さひの娑婆（しやば）の示現（じげん）や雪仏　同

雪の日やいつくも閨（やね）の夜明（よあけ）五更（ごかう）　立圃

雪やむ西向（さいかう）不背（ふはい）にし乃山　同

比叡の山へすそまけよるや富士の雪　同

町ふるゝ京の東山や残しの雪　同

わつかなくらやのかの不盡（ふじ）の雪　同

雪みつまそてさて声（こへ）もに風とまり　同

雪のふりくらくさすかや雪の跡（なごれ）　同

駒（こま）いなゝくて雪や着（ちやく）くなむ旅（たび）の空　同

ちらちりし雪や叡(ひえ)の神さくら　同

ちりかゝる雪や月かりしれぬ花さかり　同

かゝる風やゆかりらん雪の行便宜(びんぎ)　同

雪や月つもれし戴(たい)れ髭(ひげ)ちつる　同

雪は白乃葉酒やうまもこの香　同

折(たく)しらの雪ふらしみそ茶(ちや)杓竹(しやくたけ)　同

絵(ゑ)筆にもやを書写(しよしや)山の雪乃文　同

細雪や黒髭(くろひげ)山乃つくちつる　同

布引(ぬのびき)の瀧(たき)や三重(みゑ)れ雪さらし　同

ゆ蘭(らん)の花よいつくも雪の花畠(はたけ)　同

雪ハ黒し寒(さむ)さや白く靈すらん　同

篠生れ根やつらゝの同ましろも雪女　同

都らせみハ金(ひ)言(ごん)の行(ぎやう)か雪乃松　同

つらくきり帰るまひらけ身雪れ友　同

帰り路ミてよしあの松や雪女　同

霞(かすみ)

ゆく時ハちるかあられの花よりかすり　立圃

氷(こほり)　付 氷柱(ひたしら)

されみも黒とかまこそわりなか　立女

氷とそ名の水志ふしふう川いもの　重良

賀茂川は白河とうちすかうれ　宗貞

水かゝみまつ氷くゐるの朝　季延

冬まての寒におりや川る　愛宣

雨されのとも紙目にみゆるほらふ　可悦

川口乃に月すゝや雪の猿の川上　立圃

くもりそゝく氷や風におろす筋　同

波の音をとゝめわすさにする氷かな　同

水鳥

水鳥の羽や火嵐のかさ衣　徳元

さゞ波やゆらゆく流をも子ろうけ　立安

河鳥はたえそまはね真鴨かな　琢之

鴨の霜払ふ波や水かねかしら　宗言

入日の鴨やともえの浪の紋　嶺利

こそしたゞ浪うしらりや水子鳥　定親

よる浪の数とりとゝまる千鳥かな　愛宣

静かさすゝ鳥やら池の中の鴨　立圃

黒鴨の打と流つき波乃声　同

枯蘆の中に真つく真鴨かな　同

水鳥や世かもあしの波のしら　同

廻文
つくひし秋の小鴨ともしひかな　同

鴈

さく汲しるそ小利大損鶴の名　満直

わか世物をとられ物かすゝ鶴狩ぞ　私言

鶴うかゝも犬となる物のあそひかれ　信元

よき日ハ晴の日にいよ鶴の舞ぞ　仲品

しるまゝや呪のてうしよたかみ鳥　政之

鷲鷹とりもくるれや鶴乃名　家雅

わつかれの絶て何かるうみの鳴　立圃

大きも小紙かるゆか物かしきうみの鳥　同

炭

山里ハ世のうきまりもすミ火かな　常辰

わかうのえらるれもうつくや炭しら　有哉

老ふゐのかしらハらま結を炭かしら　立圃

とく炭ハ白き紙ほのいろもかな　同

天目の名紙うる炭や灰うつき　同

物すきの炭ハふれみとくうか　同

やまうちよ五徳のおしゝ炭うら　同

魚うしんをいでうる炭や黒乃絢　同

墨うもゆし扇紙つくる炭火かな　同

埋火

ゆるしくいつまかさぬり焚こそ沙　正命

ガラス使用

うつミたれ火燵は夜の氷室かな　可理

とくすミハ赤白黒のいろりかな　満置

まゝいまはあしを入たる火燵　重次

おこるまで寂しさ埋む炭火かな　良玄

あつき火を子に揃ひてや敷火燵　常辰

老ハらたむろハ腰れ火おけかな　未知

寂さ日れこ河のりとや雪く炭　立圃

冬れ日のいろりや夜の南風　同

うつミ火や常ひばちとけして枕かな　同

綿

綿帽子川猿や小まとをちらしめ　好与

うらうらハおもくぬいは綿子かれ　重圃

紙子

着れ程紙ありのはくる奥子かな　正安

唯しもあれ冬ハ縮織の紙子かな　政世

寒梅

冬の夜や春さく梅れしるとひ　立圃

年忘

老ぬれは児になりてや年わすれ　盛長

ガラス使用

老の身や元朝からの年よりまさ　政之
世乃身や十らくひせんまつりまれ　立圃

年内立春

楊貴妃のそうらか春も年乃内　泰重
としの内乃春や珍枝の梅の花　同
佐保姫もまうこ部屋住か年の内　定親
年のうちの春や玉子の烏乃殻　立圃
としの内の春や兄子のとり膝　同
年乃内の春や平の西乃京　同
としのうちの春ハまたみの揉帽子　同

歳暮

あけぬるハ岩戸の例か年の暮　立乙
うち碁や歳暮ハ春乃たつから　立圃
行年の矢はつかへつ射手まかな　同
わやうらうてしきまや千瀧　同
陵王の巻の手りうかとしの暮　同
とひくるま年ハ暮まか暮ハ今より　同

雜冬

みな座敷まかてそこら屏風の那　重頼

けうくとも肌ハゆるさしねくれる　親信

わしかさんたんかや鶴ゑかくる島　智詮

廻文躰

うまこし粋もやまとうれしまさか　近吉

売ハ児年もこうひ小妻か飛　立圃

はなく人ゑさやかせく風乃日　同

入ハ風呂あかそハ茶ハいるまも　同

寛文五乙巳暦八月中旬　立圃

四条坊門通東洞院東へ入町
水田甚左衛門開板

五とせあまりにく事過ぬるこれをみるまゝに
けうるんくてあまりの小路のおもりしいまゝ
一踊との所望しそれに拙うたにうれ
しうかなまゝそはちを恵己ハ鷹人へ出立
ときのなりて後ハ鳥康ともとして
乱をへしなりつらいはひくゑ他人とかハ
浮蔵にて新発意役者達らん座の花ゑまて
をふや作入らふえられるゝへ

別 3
5止
5

27.8.28

大正
13. 5. 14
購求

[illegible]

㊤

[illegible]

ガラス使用